

東京都立大学 子ども・若者貧困研究センター

# 豊かで余裕があるから「夢」が持てるのか？－「夢追い」型職業希望の社会経済的背景と教育達成－

Working Paper Series Vol.40

三浦 芳恵

2024年3月27日

この Working Paper の内容は著者によるものであり、当センターおよび東京都立大学の見解を反映したものではありません。なお、一部といえども無断で引用、再録することを禁じます。

子ども・若者貧困研究センター



TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY  
東京都立大学

# 豊かで余裕があるから「夢」が持てるのか？

## －「夢追い」型職業希望の社会経済的背景と教育達成－

### Can high school students have “dreams” because they are rich and can afford it?

三浦 芳恵<sup>1</sup>

#### 1. 問題設定：職業希望達成の手段としての教育

本稿では、特に「夢追い」と呼ばれるような職業希望をもつ高校生に注目して、かれらの社会経済的背景と教育達成にいかなる傾向があるのか明らかにすることを目的とする。

90年代半ば以降、若年労働市場の変動や高等教育進学率の拡大など、高校生の進路をめぐる状況は大きな変容を見せた。高校生を取り巻く社会状況が変化する中で、高校生の職業希望についても関心が集まってきた。職業希望に関する研究について、多喜(2015)は主に二種類の流れがあるという。第一に、社会階層論からの視点で、出身階層が将来の職業希望に影響し、その職業希望に応じて学校での成功が規定されるという考え方である(Sewell et al.1969)。第二に、教育社会学からの視点で、職業希望の形成に教育が及ぼす影響についての研究(荻谷 1986, 荒牧 2001, 片瀬 2005)である。本稿においては主に後者の視点から、職業希望と教育について論じていきたい。

職業希望と教育に関する先行研究においては、教育達成(学歴や学校成績)が職業達成の主要な手段としてみなされてきた。しかし、2000年代初頭に「夢追い」のためにフリーターを選択する若者が問題視される中、学歴や学校成績を手段としない形での職業希望をもつ高校生たちが注目を集めた。また、高校生段階の「夢追い」型の進路について、荒川(2009)は学力偏差値的に低位に置かれる総合選択制高校において、ASUC 職業と呼ばれる人気・稀少・学歴不問の職業を志望する生徒の割合が高く、生徒の自主性にゆだねる科目選択・進路指導が行われていることが ASUC 職業志望につながる可能性を指摘した。このように、「夢追い」型の職業を希望する若者たちは、実現可能性の低い夢に向かって不安定な生活を長引かせるという意味で、経済的なリスクが高い者たちとして扱われてきた。

上記のような議論において「夢追い」型の職業希望が学歴や学校成績を手段とする職業希望の代替的な位置づけを与えられる一方で、「夢追い」型のキャリアを歩む若者の実態を解明しつつ、かれらのライフコース全般を積極的に意味づけようとする試みも見られている(中西ら 2009、野村 2023 など)。これらの試みでは、インタビューやフィールドワークから当事者の主観的世界を明らかにするを通して、「夢追い」が代替的な進路選択やキャリア

---

<sup>1</sup> 東京都立大学子ども・若者貧困研究センター特任研究員

ではないということが主張されてきた。

「夢追い」型の職業を希望する者たちは教育達成が低く将来の経済的なリスクが高いと主張される一方で、それらは代替的なキャリアではないということも主張されてきたものの、かれらの社会経済的背景や教育達成について、客観的な状況はこれまで明らかにされてこなかった。そこで本稿では、2016年に東京都墨田区で実施された質問紙調査をもとにして、「夢追い」と呼ばれる職業希望の高校生の社会経済的背景や教育達成の傾向について、他のタイプの職業希望の高校生と比較をしながら検討していきたい。

## 2. 先行研究

では、「夢追い」型の職業希望を持つ若者にはどのような社会経済的背景や教育達成の傾向があるのだろうか。関連する先行研究を検討することで本稿の課題を設定していきたい。

まず、「夢追い」型のフリーターの家庭背景に関して、山田(2001)と小林(2006)の研究がある。山田(2001)は、結婚をせず親元で暮らすパラサイト・シングル<sup>2</sup>の若者が、親に生活を支えられ、自分の生活や社会に対して責任を負わなくてすむために、実現可能性の低い夢を追いかけるとした。また、小林(2006)は、「夢追求型」のフリーター<sup>2</sup>の生家の経済的豊かさの分析から、かれらが夢を追うことができる理由は、他のタイプのフリーターと比較をして相対的に親の所得階層が高いためではないかと示唆した。山田や小林の研究からは、実現可能性の低い「夢」を追ってフリーターを続けることは家庭に経済的余裕があるから可能になるものであることが示されている。本稿においては対象が高校生段階とはなるが、かれらの家庭に経済的余裕があるために実現可能性の低い「夢追い型」の職業希望を持つことができるのかについて検証していく必要があるだろう。

次に、「夢追い型」の職業希望をもつ高校生の出身階層と学校経験についてである。片瀬(2005)は、SSM調査において「音楽家・舞台芸術家・職業スポーツ家」になりたいという男子高校生が、1986年度から2003年度にかけて大幅に増加したことに注目した。そして、仙台圏の高校2年生に対する調査からかれらの職業希望を①当該社会の文化的に価値づけられた目標を受け入れているか、②その目標達成のための制度的手段に対する規範を内面化しているか、という観点から分類した。その結果、「著名人アスピレーション」と名付けられたカテゴリ（「音楽家・舞台芸術家等・職業スポーツ家」を希望する者）の男子に、高い出身階層（父学歴が高く、上層ホワイトカラー）が多いことを明らかにした。「著名人アスピレーション」を持つ者は、文化的に承認された目標（父親と同じ上層ホワイトカラーに就く）を達成するために本人も四年制大学進学志望が多いが、必要な制度化された手段（学業

---

<sup>2</sup> 小林(2006)は、「夢追求型」フリーターの定義として、「芸能志向型」と「職人・フリーランス志向型」の2つのパターンを示した。これらのパターンには、公務員等の試験合格、希望の業種・職種への正規雇用を妥協せずを目指す、タレントを目指すといったものが含まれている。

成績)を欠くために、非制度的・非現実的な手段(学歴を必要としない「著名人」になること)を選択しているとされている。本稿においても、「夢追い」型の高校生たちの保護者学歴、本人の希望する教育段階や学業成績を明らかにしたうえで、「夢追い」型の職業希望が学歴や学業成績を通じた職業希望の代替的な位置づけであるのかについて論じていく必要がある。

### 3. 分析の方針と使用する変数

本稿では、分析データとして東京都立大学子ども・若者貧困研究センターが墨田区から受託して実施をした「子どもの生活実態調査」を用いる。本調査は、小学5年生、中学2年生、高校2年生の年齢の子どもとその保護者を住民基本台帳から抽出し、郵送配布・回収法により悉皆調査を行ったものである。回収率は、高校2年生年齢(16-17歳)で36.0%(本人票)であった。本稿では、高校2年生年齢(16-17歳)の回収票(n=642)を分析対象としている。性別の比率は、男子48.6%、女子49.4%、無回答2.0%であった。

ここで、「夢追い」型の職業希望をどのように定義するのが課題となる。荒牧(2001)は職業希望の分析を行う際、進路ごとの制度的コンテクストに注目する必要性を述べている。上記で述べたように、先行研究では「夢追い」型の職業希望について、職業希望を達成するための制度的手段(学歴や資格)を欠き、実現可能性が低い職業という位置づけがなされて議論が行われてきた。そこで、本稿では荒川(2009)のASUC職業の概念を参照して、学歴や学業達成(公的職業資格取得を含む)を要件とせず、人気で稀少(希望者の多さに対して就ける確率が低い)の職業を「夢追い」型職業希望とした。「夢追い」型職業希望を示す「ASUC」というカテゴリに対して、学歴や資格による職業達成をする者たちと比較を行うこととし、「学歴」(学校成績や学歴による職業達成)、「資格」(短大または専門学校が中心的に提供する公的職業資格または技能による職業達成)、「夢なし」(将来就きたい職業はないと回答)と名付け、分類を行うこととした。「夢なし」については、日本企業における「職務のない雇用契約」(濱口 2009)の制度慣行によって、会社員を志望する者たちが「就きたい職業はない」と回答してこのカテゴリに含まれる可能性が高いため、「学歴」と同じような傾向を見せることが考えられる。職業希望と教育について結び付けをすることができないその他の職業については、分析の対象から除いた。

職業希望カテゴリの作成については、問5「あなたは、将来なりたい職業がありますか」について「ある」と回答した者が記入した自由記述をもとにした。将来の職業希望は複数回答可能であるため、職業希望に関する回答の合計は100%とならないことに注意されたい。日本標準職業分類をベースにしつつできるだけ本人の自由記述に忠実な分類を作成し、それを小分類と名付けた。それらを4つのカテゴリに分類したのが、図表3-1の職業希望カテゴリである。「ASUC」については、「俳優、舞踊家、演芸家(個人に教授するものを除く)」「ファッションモデル」「スタイリスト」「デザイナー」「音楽家(個人に教授するものを除く)」「職業スポーツ従事者(個人に教授するものを除く)」「文芸家、著述家(本に関する仕

事もここに含む)」「彫刻家、画家、工芸美術家」「トリマー」「動物園や水族館の飼育係など動物に関する仕事」「イラストレーター・漫画家」「声優」「ユーチューバー」「アイドル」「ゲーム関係」に当てはまる職業とした<sup>3</sup>。「学歴」については、一般的に大卒が必要要件となる職業および会社員・公務員とした。「資格」については、短大または専門学校で取得可能な公的職業資格および技能を要件としている職業や、税理士や司法書士など大卒を要件としていない職業とした。「夢なし」については、将来就きたい職業について「ない」と回答した者とした。

最も数が多いのは「夢なし」で、全体の 51.4%がこの分類で回答している。次に多いのが、「学歴」であり、17.4%である。その次が「資格」の 12.0%、「ASUC」は 7.1%となっており、最も少ない割合だった。

図表 3-1：職業希望カテゴリ

職業希望	小分類	n	%
ASUC	職業スポーツ選手、ミュージシャン・音楽家、美術系、ダンサー、書道家、写真家、その他芸術系、動物園・水族館、飼育員、トリマー、その他動物関係、小説家、その他本関係、芸人、ファッションモデル、スタイリスト、その他ファッション関係、インテリアデザイナー、ファッションデザイナー、ユーチューバー、アイドル、ゲーム関係、漫画家、声優	46	7.1
学歴	医師、歯科医師、薬剤師、教師、弁護士、公務員、会社員、カウンセラーなどの心理職、塾講師、獣医師、研究者、外交官、警察、消防士	112	17.4
資格	看護師、栄養士、介護士、幼稚園教諭、保育士、自動車整備士、建築士、美容師・ネイリスト、プログラマー、調理師、司法書士や税理士等	77	12.0
夢なし	将来就きたい職業について「なし」と回答した者	331	51.4
その他	上記に分類されない職業すべて	91	14.1

上記のカテゴリに対して、社会経済的背景や教育達成の傾向を見るために用いる変数は、図表 3-2 の通りである。分析については、クロス集計を用いることとする。なお、欠損値は各質問で除外して分析を行った。

<sup>3</sup> 荒川(2009)76-85 頁を参考にして筆者が作成した。

図表 3-2：社会経済的背景や教育達成の傾向を見るために用いる変数一覧

職業希望	・問5「あなたは、将来なりたい職業がありますか」⇒「ある」と回答した者に対して、問5-1「その職業は何ですか(自由記述)」
所得階層	・問22「公的年金と社会保障給付金以外の収入についてお聞きします。お子さんと生計を共にしている世帯全員の方の、おおよその年間収入（税込）はいくらですか。」
保護者学歴 教育期待	・問14「お子さんに、どの段階までの教育を受けさせたいと考えていますか。」 ・問35「お子さんのお母さまが、最後に通った学校は次のどちらにあたりますか。」 ・問36「お子さんのお父さまが、最後に通った学校は次のどちらにあたりますか。」
教育達成(学校 成績・本人が希 望する教育段 階・高校学科)	・問6「あなたは、今後、通いたいと希望する学校がありますか。あてはまる学校にすべて○をつけてください。」 ・問30-1「(高校の)学科」 ・問33「あなたは、学校の授業がわからないことがありますか（ありましたか）」

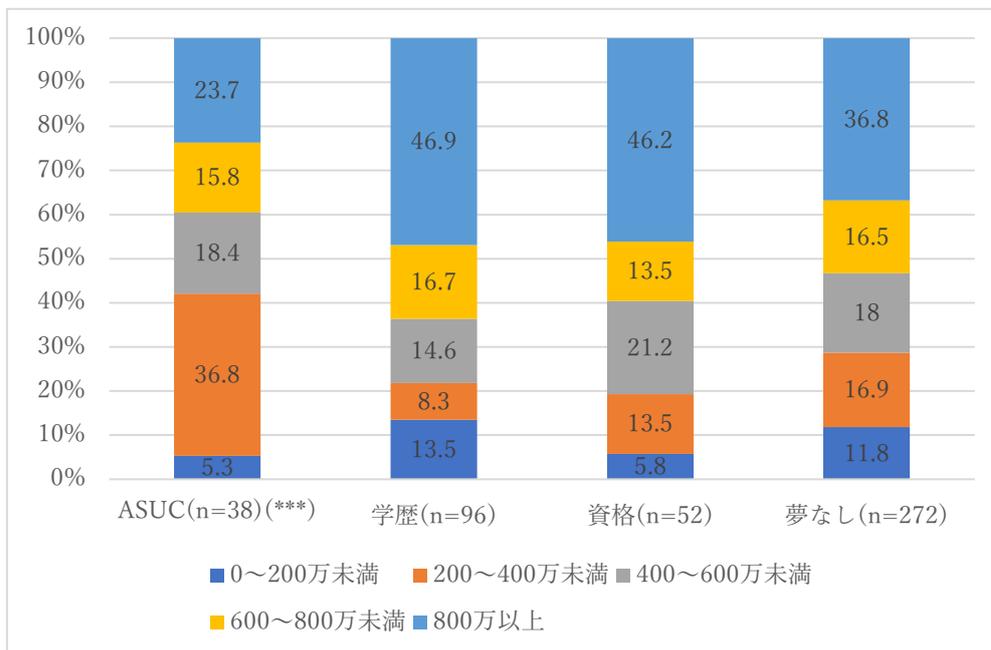
#### 4. 分析：職業希望と社会経済的背景・教育達成<sup>4</sup>

##### 4-1. 所得階層：世帯収入

まず、職業希望と世帯年収との関係について見ていきたい(図表 4-1-1)。志望職種別の世帯年収を見ていくと、「ASUC」で最も割合が高いのは年収 200～400 万円未満のラインであり、36.8%となっている。「ASUC」は必ずしも他と比べて世帯収入が高くはないことがわかる。「ASUC」で年収 800 万以上の世帯は 23.7%となっているが、この点についてほかの職業希望と比較をして低い割合となっている。よって、「ASUC」は他の職業希望と比較をして、特段高い世帯収入がある傾向は見られず、むしろ低い傾向がある。800 万以上の割合が最も高いのは「学歴」の 46.9%、「資格」の 46.2%となっており、世帯収入についてはこの 2 グループが相対的に高い傾向を見せている。

<sup>4</sup> 本章ではグラフの中でカイ二乗検定による有意確率を示しているが、\*\*\* (1%水準)、\*\* (5%水準)、\* (10%水準)として表現している。

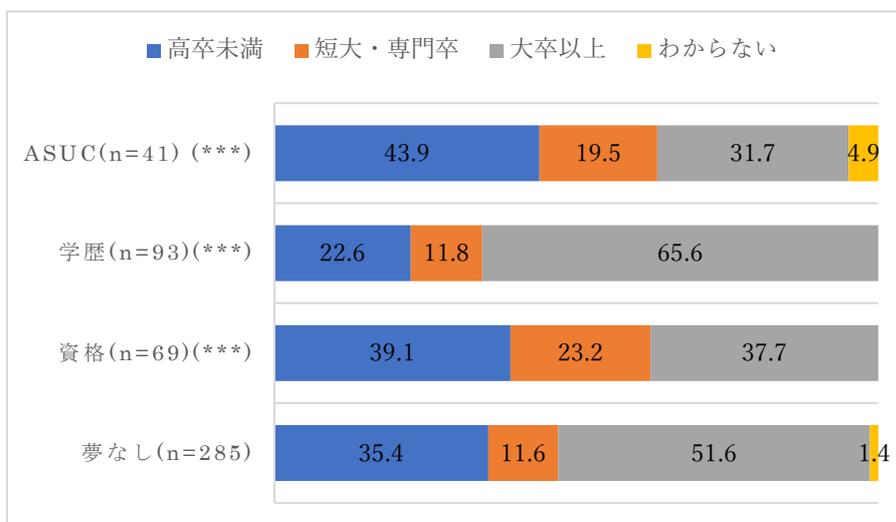
図表 4-1-1：職業希望別世帯収入（16 - 17 歳）（単位：％）



#### 4-2. 出身階層：父学歴と母学歴

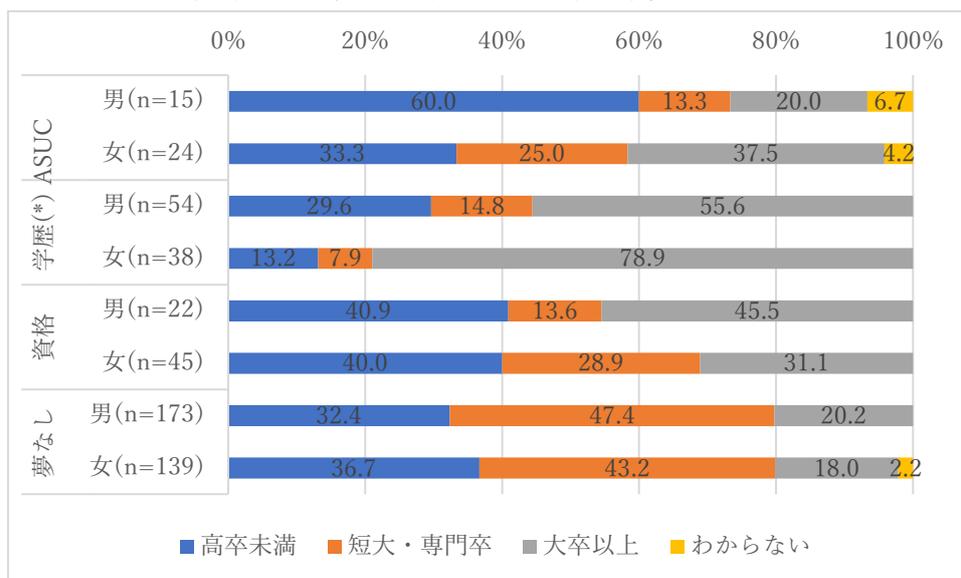
父学歴(図表 4-2-1)であるが、全体的に「ASUC」は父高卒未満(43.9%)の割合が最も高く、また父短大・専門卒(19.5%)の割合も相対的に高い。また、父大卒以上割合が相対的に低い(31.7%)傾向も見られている。「ASUC」に次いで父大卒以上割合が低い傾向が見られるのは、「資格」であり、37.7%となっている。最も父大卒以上割合が高いのは「学歴」であり、65.6%が父大卒以上となっている。次点が「夢なし」であり、51.6%が父大卒以上である。

図表 4-2-1：職業希望別父学歴(16-17 歳) (単位：％)



次に父学歴を男女別<sup>5</sup>で見ていきたい(図表 4-2-2)。「ASUC」の男子は、父高卒未満割合が最も高く 60.0%となっている。「ASUC」の男子に次いで父高卒未満割合が高いのは「資格」の男女であり、いずれも 4 割程度となっている。父大卒以上割合が最も低いのは「夢なし」の男女と「ASUC」の男子であり、いずれも 2 割程度となっている。次に父大卒以上割合が低いのは「資格」の女子であり、31.1%となっている。最も父大卒以上割合が高いカテゴリは「学歴」であり、男子で 55.6%、女子で 78.9%となっている。

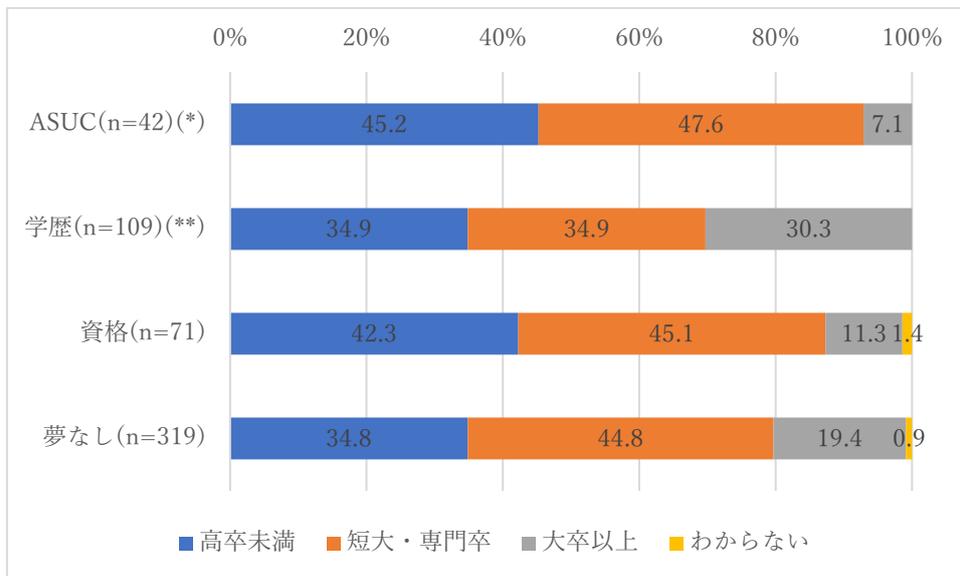
図表 4-2-2：職業希望別男女別父学歴(16-17 歳)(単位：%)



母学歴(図表 4-2-3)については、「ASUC」は母高卒未満の割合が最も高く、45.2%となっている。ただし、「資格」の母高卒未満の割合も 42.3%となっており同程度となっている。また、「ASUC」の母短大・専門卒の割合は 47.6%となっており、最も高い割合を示している。ただし、「資格」や「夢なし」においても母短大・専門卒の割合は同程度となっている。また、「ASUC」では母大卒以上割合が最も低く、7.1%となっている。「資格」についても母大卒以上割合が 11.3%となっており、相対的に低い傾向が見られている。

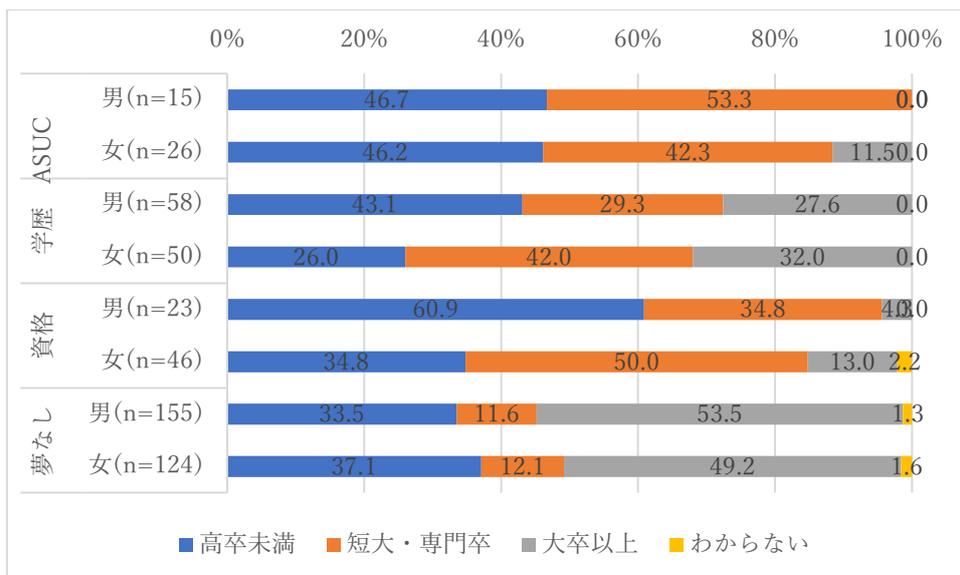
<sup>5</sup> 性別については「無回答」の項目も存在しているが、どのカテゴリも 1~2 名であったため今回は分析から除外した。

図表 4-2-3：職業希望別母学歴(16-17 歳) (単位：%)



母学歴を男女別に見ると(図表 4-2-4)、「ASUC」ではサンプルが少ないせいもあるが、男子の母大卒以上割合は 0%であった。「ASUC」女子の母大卒以上割合も 11.5%にとどまっておき、男女ともに母大卒割合は低い傾向が見られている。「資格」についても母大卒割合が低い傾向が見られており、男子の母大卒は 4.3%、女子の母大卒は 13.0%となっていた。最も母大卒割合が高い層は「夢なし」で、男子 53.5%、女子 49.2%となっている。次いで母大卒割合が高い層は、「学歴」の男子 27.6%、女子 32.0%となっている。

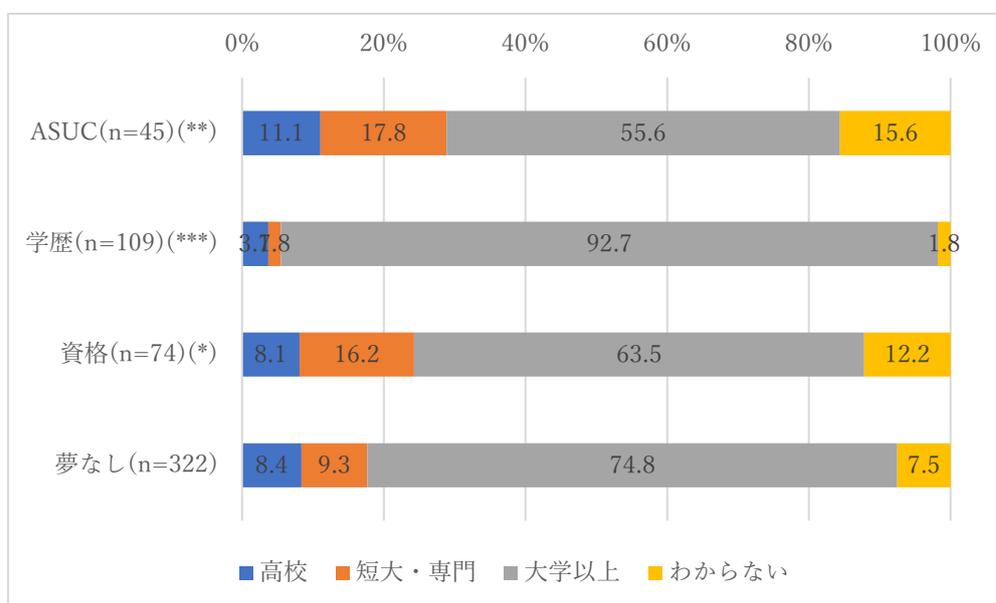
図表 4-2-4：職業希望別男女別母学歴(16-17 歳) (単位：%)



### 4-3. 保護者教育期待

保護者の教育期待(図表 4-3-1)について、「ASUC」に見られる特徴としては、短大・専門進学を希望する保護者の割合が 17.8%となっており、他のカテゴリよりも高い割合を示していることである。「ASUC」で大学以上を望む割合は 55.6%となっており、「学歴」(92.7%)や「夢なし」(74.8%)と比較をしてかなり低い割合にとどまっている。「資格」もまた「ASUC」と同様の傾向を示しており、短大・専門を希望する保護者の割合が 16.2%となっており、相対的に高い割合となっている。また、大学以上を希望する保護者の割合も 63.5%となっており、相対的に低い割合にとどまっている。また、「ASUC」と「資格」においては「わからない」と回答する者の割合が高いことも特徴であり、「ASUC」で 15.6%、「資格」で 12.2%となっている。

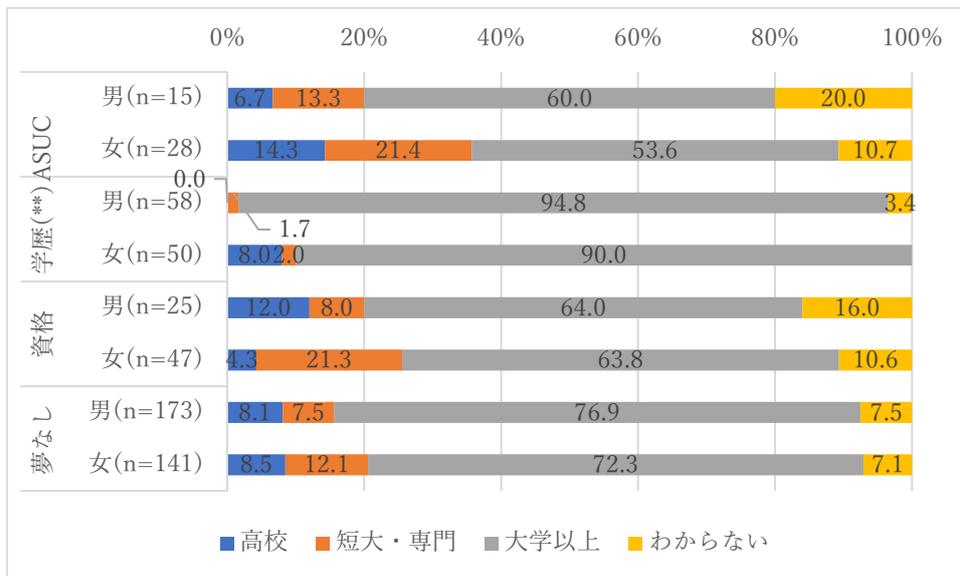
図表 4-3-1：職業希望別保護者教育期待（16-17 歳）（単位：％）



保護者の教育期待を男女別で見ると(図表 4-3-2)、最も大学以上進学への期待が低いのが「ASUC」女子となっており、53.6%となっている。その次に、「ASUC」男子、資格の男女についても大学以上への期待が 6 割程度にとどまっており、相対的に低い傾向が見られている。大学以上を望む割合が最も高いのは、「学歴」男子で 94.8%、同カテゴリの女子においても 90%の保護者が大学進学を望むと回答していた。

また、短大・専門を望む割合については「ASUC」女子と「資格」女子において相対的に高い傾向が見られており、いずれも 2 割程度となっている。全体では「ASUC」「資格」における短大・専門を望む割合が相対的に高い傾向が見られていたが、男子では「ASUC」「資格」「夢なし」の短大・専門進学希望の割合について大きな差はなかった。

図表 4-3-2：男女別職業希望別保護者教育期待（16-17歳）（単位：％）

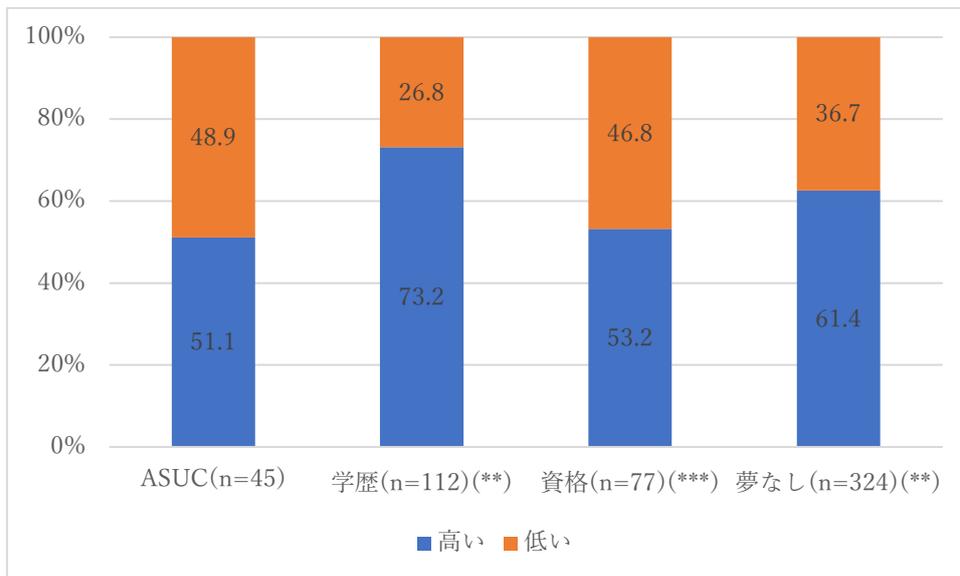


#### 4-4. 本人の教育達成：成績自己評価・希望する教育段階・高校学科

職業希望別の成績自己評価<sup>6</sup>(図表 4-4-1)を見ていくと、「ASUC」「資格」において相対的に成績自己評価が低い傾向が見られており、「ASUC」で「わかる」の割合は51.1%となっており、最も低い割合を示している。「資格」では53.2%となっており、こちらも相対的に低い割合である。成績自己評価が最も高いのは「学歴」であり、73.2%が学校の授業がわかると回答している。また、「夢なし」についても同様に成績自己評価が相対的に高い傾向にあり、61.4%が学校の授業がわかると回答している。

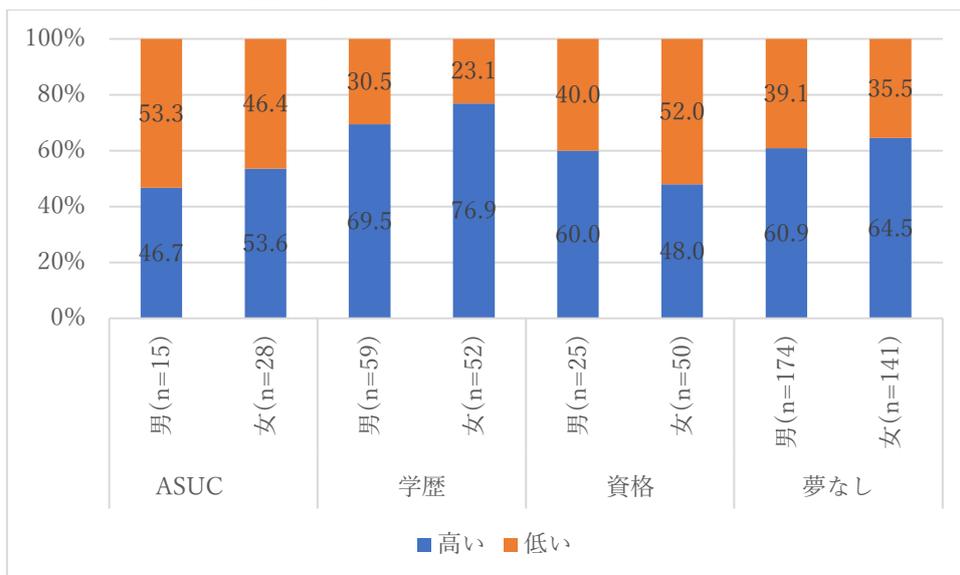
<sup>6</sup> 学校の授業について、「いつもわかる」「だいたいわかる」と回答した者たちを成績自己評価「高い」とし、「あまりわからない」「わからないことが多い」「ほとんどわからない」を成績自己評価「低い」とした。

図表 4-4-1：職業希望別成績自己評価（16-17 歳）（単位：％）



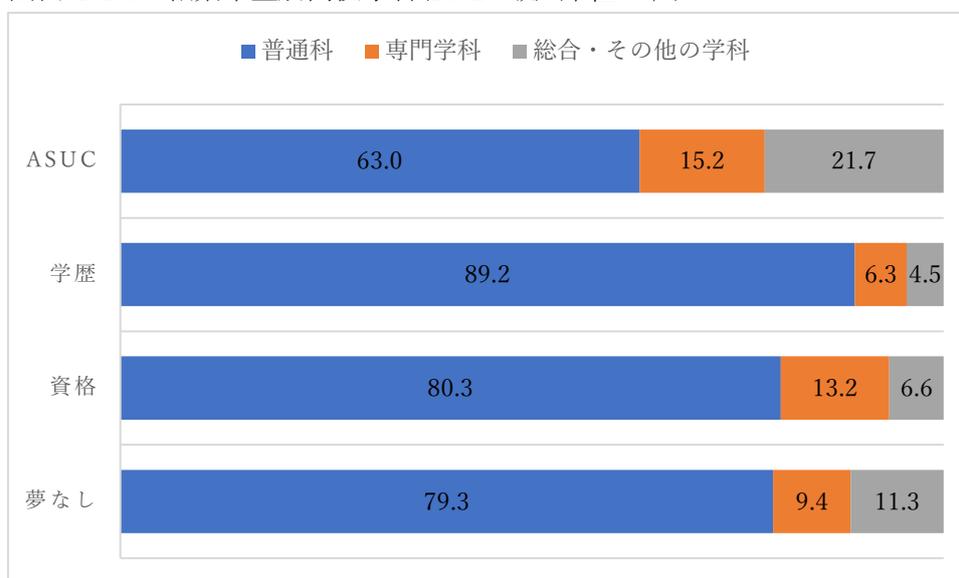
男女別の成績自己評価（図表 4-4-2）を見ていくと、最も成績自己評価が低いのは、「ASUC」男子であり、46.7%となっていた。次に自己評価が低いのが「資格」の女子であり、48.0%となっている。また、その次に自己評価が低いのは「ASUC」女子であり、53.6%となっている。最も成績自己評価が高いのは「学歴」女子であり、76.9%である。次に自己評価が高いのは、「学歴」男子の 69.5%、「夢なし」女子の 64.5%となっている。総じて、「ASUC」や「資格（女子のみ）」の成績自己評価は低い傾向が見られている。

図表 4-4-2：職業希望別男女別成績自己評価(16-17 歳) (単位：％)



本稿で分析する調査においては、本人の主観的な学習理解度しか尋ねることはできていないため、併せて高校学科を確認することによって、「夢追い」型の職業希望を持つ高校生たちが学歴や学業成績を中心とした業績主義的な価値観に基づく学校経験をしているのかについても見ていきたい(図表 4-4-3)。「ASUC」においては、総合・その他の学科の割合が高い傾向が見られており、21.7%となっている。「ASUC」では普通科割合が最も低く、63.0%にとどまっている。また、「ASUC」と「資格」では専門学科割合が高い傾向が見られており、それぞれ 15.2%、13.2%となっている。普通科の割合が最も高いのは「学歴」で 89.2%となっている。次いで高いのは、「資格」の 80.3%、「夢なし」の 79.3%である。以上より、「ASUC」や「資格」においては普通科以外の学科の割合が高く、特に「ASUC」では総合・その他の学科割合が他よりも高い傾向が見られていることがわかる。

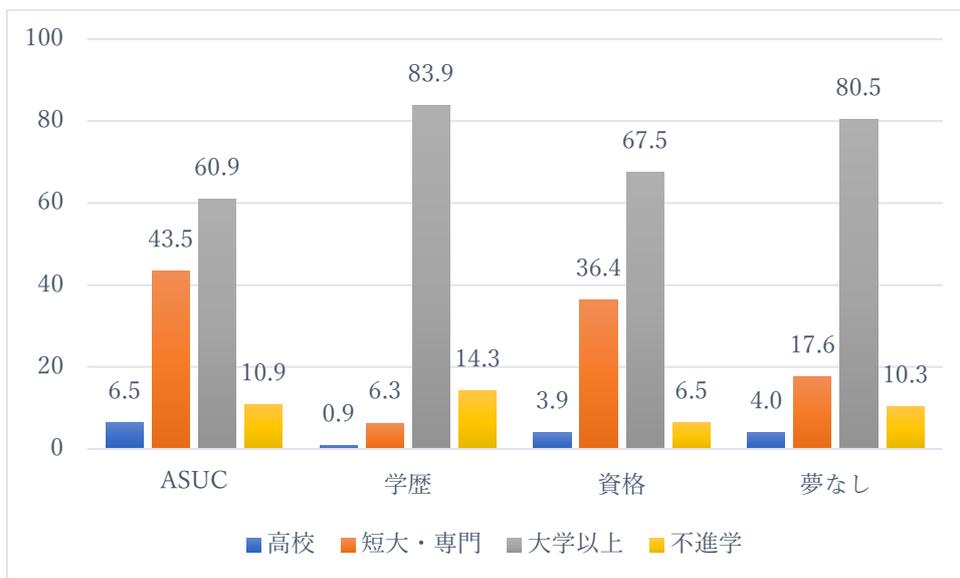
図表 4-4-3：職業希望別高校学科(16-17 歳)(単位：%)



次に、職業希望別別の本人希望学歴(図表 4-4-4)について見ていきたい<sup>7</sup>。「ASUC」の特徴は、短大・専門進学を志望する者の割合が高いことである。「ASUC」で短大・専門進学を望む者は 43.5%となっており、他のカテゴリよりも高い割合となっている。「資格」についても短大・専門進学を望む者が相対的に多く、36.4%となっている。大学以上を望む割合が最も高いのは「学歴」であり 83.9%となっている。「夢なし」についても大学以上を希望する割合が高く、80.5%となっている。一方で、「ASUC」と「資格」については大学進学希望率が相対的に低く、それぞれ 60.9%、67.5%にとどまっている。

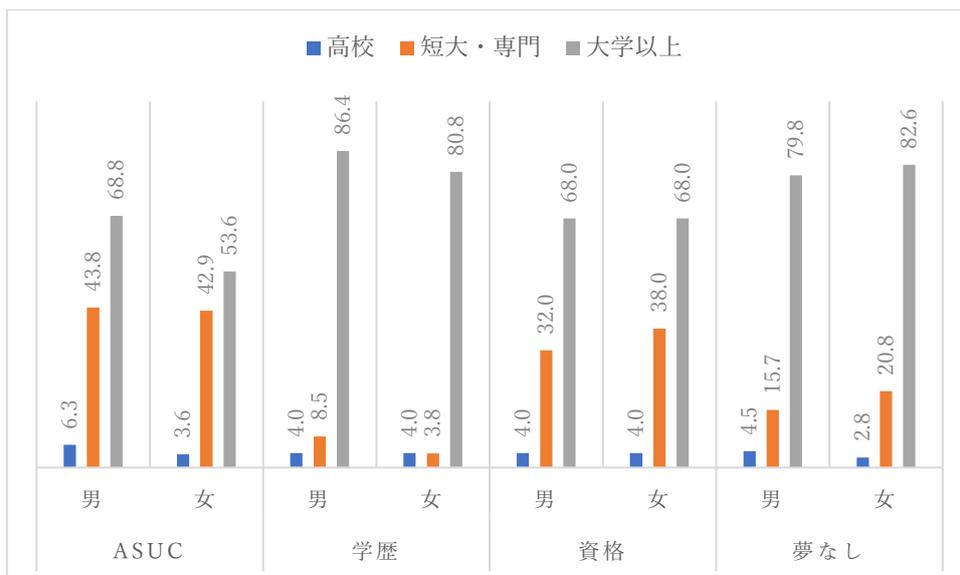
<sup>7</sup> この質問項目は今後進学したい学校を複数回答で問うているため、回答の合計は 100% とならない。「高校」は今後何らかの高校に入学したいと回答した割合、「不進学」は高校卒業後の進学を考えていない割合である。

図表 4-4-4：職業希望別本人希望学歴(16-17歳)(単位：%)



男女別の本人希望学歴(図表 4-4-5)についても見ていきたい。最も大学進学希望率が低いのは、「ASUC」の女子であり、53.6%にとどまっている。また、「ASUC」男子と「資格」男女についても、大学進学を希望する割合は68%程度となっており、「学歴」や「夢なし」が男女ともに8割程度大学進学を希望していることに対して、低い割合を示している。また、「ASUC」と「資格」においては短大・専門学校を希望する割合も高く、「ASUC」では4割以上、「資格」では3割以上となっている。

図表 4-4-5：職業希望別男女別本人希望学歴(16-17歳)(単位：%)



## 5. 結論：豊かで余裕があるから「夢」が持てるのか？

本稿では、「夢追い」型の職業希望をもつ高校生の社会経済的背景と教育達成を他の職業希望と比較してその特徴を明らかにすることを試みた。明らかとなったことは、以下の通りである。

第一に、先行研究においては実現可能性が低い「夢」が追えるのは経済的に余裕がある層であるためではないかという理解がなされてきた。本稿で行った分析は、高校2年生段階の職業希望ではあるために学校卒業後の状況を対象とした先行研究と同様の条件として比較はできないものの、少なくとも高校2年生段階において「夢追い」型の職業希望を持つ層は、学歴や資格といった制度的手段を用いた職業達成を希望する層と比較をして、決して世帯収入が高くはないことがわかった。「夢追い」型の職業希望を持つ高校生の生家が、かれらを支え続けるほど経済的に豊かではない場合、「夢追い」型の職業希望はやはりリスクが高い選択として捉えることもできるかもしれない。しかし、現代日本における若年層に向けた生活支援が脆弱である状況を鑑みると、若者たち自身の職業選択のありようを問題とすべきではなく、若者たちがいかなる職業を選んでも生きていけるような仕組みづくりを進めていく必要があるだろう。

第二に、先行研究においては、自身の学業成績が低く親の学歴や職業威信が高い層が「著名人アスピレーション」として制度的な手段によらない地位達成（「夢追い」）を目指すことが指摘されてきた。確かに、本稿においても「ASUC」と「資格」で相対的に学業成績への自己評価が低い傾向が見られていたことから、「夢追い」型の職業希望をもつ高校生たちは高い教育達成は果たしていないと考えられる。一方で、保護者学歴や保護者の教育期待を見ると、「学歴」や「夢なし」など制度的手段を通して会社員になることを志望する者たちが多く含まれると考えられるようなカテゴリと比較をして決して高いわけではなかった。

「ASUC」や「資格」では、保護者学歴や保護者教育期待について短大や専門学校の割合が高い傾向が見られており、また子ども本人の進学期待についても、短大や専門学校を希望する者の割合が高い傾向にあった。このことから、「夢追い」型職業希望をもつ高校生たちの出身家庭の文化と高校卒業後の進路やその後に就きたい職業について大きな乖離があるわけではなく、むしろ一致しているとも考えられる。また、「ASUC」において本人の高校学科が総合学科等の学科が多いという点については、荒川(2009)が指摘したように、「夢追い」の進路を選択する上での要因として、フォーマルな学校カリキュラムの影響<sup>8</sup>も大きいと考えられる。すなわち、かれらは低い教育達成によって保護者の期待に応えられず「代替的」な進路を選択しているというよりも、出身家庭の文化や自身が経験してきた学校カリキュラムに親和的な進路やキャリアを志向している傾向にあると言える。

---

<sup>8</sup> 荒川(2009)は、学力偏差値中位以下の総合選択制学科におけるカリキュラムや進路指導が生徒自身の個人的な選択を重視していることから、生徒たちの職業希望が制度的な手段を要件としない選択、ASUC職業に向かう傾向があるのではないのかと分析している。

ただし、上記の知見は「夢追い」の定義をどのように設定するのか、社会経済的な背景を示す変数に何を用いるのかによって結果が異なってくるだろう。もとより、高校生の進路希望に対する社会経済的背景の影響やその変化に関する研究成果は一致していないことも多く、その原因としては比較する時代、対象となった高校生の学年や居住地、用いる社会経済的背景に関する変数や統制変数の違いなど、さまざまな要因が指摘されてきた(藤原 2015)。さらに、本稿での知見は東京都墨田区という限られた地域で行われた調査をもとにしており、高校生全体の進路に関する知見として一般化することには限界がある。そうであったとしても、本稿の成果として少なくとも言えることは、特定の地域や学年において、「夢」を追おうとする若者は必ずしも社会経済的に恵まれているわけではないということである。今回は対象とする地域や分析に用いる変数に限界があったものの、今後はより精緻な形で変数を用い、地域による違いを意識した分析を行うことで、本稿で扱った問いをさらに検証していく必要があるだろう。

#### 参考・引用文献

- 荒川葉(2009)『「夢追い」型進路形成の功罪』東信堂。
- 荒牧草平(2001)「高校生にとっての職業希望」尾嶋史章編『現代高校生の計量社会学—進路・生活・世代—』ミネルヴァ書房,81-106頁。
- 藤原翔(2015)「進学率の上昇は進路希望の社会経済的格差を縮小させたのか—2002年と2012年の比較分析—」中澤渉・藤原翔編著『格差社会の中の高校生—家族・学校・進路選択—』勁草書房,21-36頁。
- 濱口桂一郎(2009)『新しい労働社会—雇用システムの再構築へ』岩波書店。
- 片瀬一男(2005)『夢の行方—高校生の教育・職業アスピレーションの変容—』東北大学出版会。
- 苅谷剛彦(1986)「閉ざされた将来像—教育選抜の可能性と中学生の『自己選抜』」『教育社会学研究』41,95-109。
- 小林大祐(2006)「フリーターの労働条件と生活—フリーターは生活に不満を感じているのか—」太郎丸博編『フリーターとニートの社会学』97-120頁。
- 中西新太郎・高山智樹編著(2009)『ノンエリート青年の社会空間—働くこと、生きること、「大人になる」ということ—』大月書店。
- 野村駿(2023)『夢と生きる—バンドマンの社会学—』岩波書店。
- Sewell,W.H.,A.O.Haller and A. Portes,1969,"The Educational and Early Occupational Attainment Process," *American Sociological Review*,34(1):82-92.
- 多喜弘文(2015)「高校生の職業希望における多次元性—職業志向性の規定要因に着目して—」澤渉・藤原翔編著『格差社会の中の高校生—家族・学校・進路選択—』勁草書房,81-95頁。
- 山田昌弘(2001)『家族というリスク』勁草書房。
- ※本稿は科学研究費補助金(課題番号 22H05098)の助成を受けている。